宿場町 歩きたくなる

江戸時代、諸国が安定し参勤交代の制度もできて、全国の街道と宿場が整備された。旅行を制限された庶民も伊勢参りには行くことができ、江戸後期には全人口の一割以上が参詣したといわれる。富士山も信仰の対象となった。一八二二年に十返舎一九の「東海道中膝栗毛」シリーズが完結し、二百年たった今でも弥次さん喜多さんの名を知らない人がないベストセラーとなった。伊能忠敬の日本地図が完成したのがその前年であるから、この時期に日本列島の各地に対する人々の関心が飛躍的に高まったことがわかる。

その関心は、浮世絵版画にも及んだ。本展のメインとなる歌川広重の「東海道五拾三次」が保永堂を版元として出版されたのは、三三年である。葛飾北斎の「富嶽三十六景」も同じ時期に刊行され、どちらも大人気を博した。これら揃物の名所図会は、一点一点が鑑賞の対象となると同時に、全作をコンプリート（完全収蔵）するという収集家の意欲もかきたてた。

東海道の絵は、沿線に住む者の興味を特にそそる。

「池鯉鮒　首夏馬市」＝写真＝は現代の愛知県知立市を描く。この宿場から東の松並木で、毎年首夏（旧暦四月）に馬を売買する市が開かれた。風の吹きわたる野原が、広がりを強調した構図で表されている。この松並木は現在も残る。

（三菱東京UFJ銀行貨幣資料館蔵）

東海道はおおむね国道1号と重なり、有松（名古屋市）など古い町並みや神社仏閣が残っているところも少なくない。「宮」（熱田神宮）からはJR東海道線を離れて船で三重県桑名市へ渡り、新名神高速道路と並行して京都にいたる。これから外出が気持ちの良い季節、本展で見た古い宿場町を歩くのは、楽しい休日の過ごし方になるに違いない。（浅野和生＝愛知教育大教授）

▶ 名古屋ボストン美術館　☎052(684)0101　5月14日まで

歌川広重　東海道五拾三次展

アドルフ・ヴェルフリ　二萬五千頁の王国